

青春の夢

吉岡嘉暁（昭和48年修士卒／広島市在住）

平成26年の10月に日本数学会に入会した。67歳の年齢では退会と間違われそうであるが、通常ではあまりないと思われる高齢での入会である。入会に当たっては、大学院同期の三重大学の石谷寛先生に推薦をお願いした。思い返してみるに、高校生（広島県立向原高校）の時は化学と数学が好きであった。大学に進学する時に迷ったが、数学がどうも受験テクニク的に思え、京都大学工学部の高分子化学科を選んだ。当時、高校で化学を教えておられた小野先生の影響も大きかった。小野先生の理科室にはよく出入りしたものである。

京都大学に入ってから、教養部で線形代数や微分積分学の授業を受けるうちに、次第に数学の方に興味が増していった。勉強しなかったわけではないが、大学に入ってから、化学の方の授業はそれほど面白く思った記憶がない。教養部の時の微分積分学は、エルゴード理論の十時東生先生（当時助教授）の授業を受けた。大学の数学は、高校数学とは全く異なるもので、大変新鮮に感じた。数学はレベルが高度で難しいと感じたが、趣味として数学の本はよく読んだ。数学科の学生ではないので、我流の独習で、深い読み方は出来ていなかったと思う。4年の時に、試しに数学科の大学院を3か所受けてみたが、すべて落ちてしまった。受験してみて、問題を解く基礎力・思考力が足りないと感じた。工学部を卒業する時、就職せずに数学科の大学院に進学することに気持ちを固めた。大学院の受験は8月で、5ヶ月間一心不乱に勉強した。卒業したものの就職もせず、合格の見込みがあるのかわからず、非常に不安で不安定な時期でした。どこも合格できずに行く処がなかったらどうしようと、ほとんど恐怖に近い心理状態であった。あまりのストレスで、髪の毛が良く抜けた。散髪屋さんで、「お悩みですか。」といわれたくらいである。人生を振り返ってみても、こんなに強いストレスは感じたことがない。私にとって、まさに人生をかけた全力投球であったが、今度は3ヶ所受けて3か所ともなんとか合格することが出来た。溝畑先生の「ルベーク積分」と浅野・永尾著の「群論」はよく読み込んだ記憶がある。線形代数はそれなりに理解できたが、永田先生の抽象代数の本は分かった気がなくて、自分にはかなり不安要素であった。やみくもの突撃精神でなんとかこなしたものの、正直なところ消耗した。趣味としては好きでも、人生を数学にかけるには冒険であったと思う。まったくの若気の至

りで、いま思い返してみても無謀であったと思う。この時期のストレスはかなりトラウマにもなった。宙ぶらりんな状態はもうこりごりだと思った。

大学院では確率論を専攻し、渡辺信三先生に指導教官になってもらった。なぜ確率論を選んだかという、将来の研究の方向として、ぼんやりとながらも高分子（ポリマー）溶液の確率論的な解析を考えていたからである。1年の時は確率論の基礎を勉強し、2年になって「random system」の文献を読み始めた。修士課程2年のころに、博士浪人の話題が出始めた。博士課程を出ても、大学に残れない人が出始めていた頃である。博士課程まで行っても、万一助手の就職がなかったらどうしようと思った。卒業しても、また宙ぶらりんになるのはもうしんどいなと思い、あっさり化学職で地方公務員試験を受けたところ、2か所受かり、とりあえず安心した。ところがどうにも、化学で一生飯を食う気が起きなくて、正直なところ困ってしまった。

色々考え始めた頃、身近に医学部の人がいて、医師の道もいいかもと思った。運よく9月には修士論文のめどが立ったので、10月から医学部の受験勉強も始めることにした。受かれば行ってもいいかなと思っていたが、地元の医学部を受けたところ合格したので、医者になる道を選んだ。大学院を修了して数学科を去る時には、さすがに悲しくも有り残念な気持であった。渡辺信三先生には助手の話もしていただいたが、まことに申し訳なくも広島に帰らせてもらった。

医学部の6年間はそれなりに勉強しつつ楽しく過ごさせてもらった。今までと全く異なる分野の勉強ではあったが、あまり抵抗はなかった。結果的には自分に合っていたということかな。卒業直後は麻酔科に入局したが、その後広島市役所に奉職し、衛生行政の道に転向した。市役所では、保健所・本庁・衛生研究所・看護専門学校を経て退職した。最後の看護専門学校では、校長を拝命し授業も担当した。行政には30年以上勤務したが、自分にはぴったりの天職であったと思う。この人生の選択に悔いはなかった。市役所を退職して、アルバイトをしながらも、ひまな折には数学や物理の読み物を読むようになった。

最初は専門書ではなく、市民レベルの本であったが、読んでいるうちに、次第にレベルの高い本にも手を出すようになった。一般トポロジーや群論など、かなり忘れてしまっていたが、青春時代を思い出しながら楽しく読み進めた。意外に思えるが、若いときは分からなかったことが、そうだったのかと思えることにも出会えた。何よりも、楽しく読めるのが嬉しかった。少しずつ向上心

が湧いてきた。その挙句が、最初に書いた日本数学会への入会である。80歳までは夢を友に元気に生きたいと思う。第二の青春の始まりである。まだ気付かれていない面白い発見との出会いを照準にして、数学の専門誌への投稿もねらう気である今日この頃である。

先般の京都大学理学研究科・理学部数学教室同窓会設立総会、設立記念講演会、設立記念懇親会にはいずれも参加させてもらった。今回の同窓会では、懐かしい教室の見学ができ、青春時代に帰ることが出来た。懇親会では、恩師の渡辺信三先生にも会え、お元気な様子で大変に良かった。40年ぶりの再会で懐かしい限りであった。同窓会設立に御尽力いただいた関係者の皆様方に感謝いたします。

母校の数学科の今後の人材輩出とさらなる飛躍を心から願っています。